

質問課題

討論を行う授業回ごとに、以下の二種類のうちどちらかの質問を一つ提出しなければならない。

- 明確化質問
- 批判的質問

質問は授業前に提出すること。

提出数に関する要件

学期を通して、決められた数の質問を提出する必要がある。そのうち、少なくとも三分の二は批判的質問でなければならず、明確化質問は最大でも三分の一までしか提出できない。

重要：割当数を超えて提出された明確化質問は、未提出として扱われ、課題完了数には含まれない。

明確化質問

明確化質問とは、読書そのものが自分の理解を妨げた箇所を特定する質問である。

これらの質問は、「ここが理解できない」という反応を表現するものであり、理解の流れが止まってしまった瞬間を捉えるものである。

指定文献の中で、本当に混乱した箇所について質問すること。つまり、テキストがわかりにくくなった箇所、議論の流れが追えなくなった箇所、用語の意味が不明確だった箇所、あるいは著者が何を言おうとしているのかわからなくなった箇所について質問してほしい。

例

- 「47 ページで使われている『公共性』とは、具体的にどういう意味なのでしょうか？ 日常的な意味なのか、それとも専門的な概念として使われているのか判断できません。」
- 「第 2 節第三段落で議論の流れが追えなくなりました。X についての主張が、どうやって Y という結論につながるのでしょうか？」
- 「ここで使われている『自由』という語は、先週扱った使い方と何が違うのでしょうか？」

これらの質問は、授業で何を明確にする必要があるかを把握するためのものである。私（教員）は、授業の冒頭で明確化質問に答え、必要な説明を行うよう努める。

つまり、明確化質問とは、全員が共通理解に立てるようにするためのものであり、授業討論を構築するための最低限の土台を整えるためのものである。

批判的質問

読んでいるとき、文献中のさまざまな箇所に対して、自然と何らかの反応が生じるはずである。何かが強く印象に残ったり、疑問に感じられたり、不満を覚えたり、あるいは疑問を投げかけたくなったりすることもあるだろう。そうした反応が、質問を作るための素材になる。読み進めながらそれらを記録し、あとで質問の形にしてほしい。

質問とは、すでに自分の中に生じた反応を言葉としてはっきり表現したものにすぎない。あとになって文献を見つめながら、「何か質問を作らなければ」と考えて、別に作り出すようなものではない。

つまり、この課題にどう向き合うかが、何よりも重要になる。これらの質問を書いているのは、私（先生）を感心させるためでも、クラスメートに賢く見せるためでもない。したがって、「先生は何を求めているのか」や「どんな質問なら賢そうに聞こえるか」を考えるべきではない。むしろ、「自分はここで実際に何に興味を持ったのか」「読んでいるとき、本当にどのような疑問を抱いたのか」を考えてほしい。

もしこの課題に強いストレスを感じたり、必要以上に長い時間をかけていたりするなら、それはこの課題への向き合い方が少しずれているサインかもしれない。本当に自分の中に生じた疑問であれば、本来それほど苦勞せずに出てくるはずである。というのも、その反応自体はすでに生じているからである。質問を作るとは、単に、その反応を引き起こしたものをはっきり捉えることにすぎない。もしそれが「大変な作業」のように感じられるなら、おそらく、実際に自分の中に生じた疑問を表現するのではなく、「立派に見える質問」を無理に作り出そうとしてしまっている。そういうときは、一度立ち止まり、もう一度文献に戻って、自分が実際にどこに反応していたのかを確認してほしい。

要するに、あなたの質問は、指定文献および／またはそれに関する授業討論から生じたものであるべきである。また、それらの概念について、自分なりに考え、取り組もうとした痕跡が示されていなければならない。文献への向き合い方に特定の「正しい型」があるわけではないが、自分自身のやり方で内容を理解し、考察しようとしたことが伝わる必要がある。文献と無関係な質問や、準備不足が明らかな質問は避けること。タイトルだけを見たり、本文を少し眺めただけで作った質問は認めない。

批判的質問は、授業討論で取り上げる候補となり、クラス全体でどの質問を議論するかを決める。本当に自分が気になっていることについて質問すれば、自分が実際に考えてみたい問題が、その授業全体の中心テーマになる可能性も十分にある。この課題は、かなり直接的な意味で、授業を自分にとって重要な問いへと向けていくための機会でもある。